



囚われの悪魔に捕まって
体液搾取で精力を吸い取られてしまう
聖女見習いのお話

【登場人物】

・ノエル

何百年も前の聖女に封印され、教会の最奥に捕らえられた大悪魔のうちの一人。色欲を司る。

契約した人間の体液から精力を吸収し、糧とする。

高飛車であっけらかんとした性格。己の精力を満たすためには手段を選ばないが、なぜかメリルに色々と忠告してきて————。

・メリル

聖女見習い。

真面目で純粋な性格。自己犠牲の意識が強い。

両親を亡くした孤児で、大聖堂の司祭にスカウトされて聖女見習いとなった。

数百年前、過去最高と言われた聖女様が王都に大聖堂を造った。大聖堂はそれから長い間聖職者達が修練の場として使い、今も多くの人々の安息の場として解放されている。

大聖堂には聖女見習いと言われる女性が多く身を寄せていた。聖女見習いは年齢は十代から二十代、未婚の若い女性が主だ。彼女達は生まれ持った光魔法の素質を司祭に見出され、国をより豊かにするために役割を与えられている。私もその一人だ。

「メリル、今月の掃除当番、あなたでしょ？ わたくしたちは司祭様に用事を頼まれているの。だからよろしくね」

私にそう言いつけてきた彼女は同じく聖女見習いのクリステイアヌとその友人だ。私が返事しようとする前に、クリステイアヌは「なあに？ 言いたいことでもあるのかしら？」と反論した。

クリステイアーヌは同じ班だから掃除と一緒にこなすはずだが、彼女が私と一緒に何かしたことは一度もなかった。彼女は忙しく、何かにつけてこうして用事を入れて断ってくる。

「……分かった。やっておくね」

「よろしくね」

クリステイアーヌは上機嫌で去っていく。私は一人ため息をついた。彼女達はお役目があるのだから仕方ない。そう諦めお祈りのために聖堂へ向かった。

「ねえ、今月の掃除当番ってメリル達の班じゃなかった？」

お祈りを終わるとみんなゾロゾロと聖堂を出ていく。私も出ようとしたところで、私と同じ聖女見習いのレオノーラが声を掛けてきた。

「うん。でもみんな用事があるって言って出て行ってしまつて……今日は『鎮めの間』の掃除なの」

『鎮めの間』は大聖堂の最奥地にある部屋だ。普段は使用されていないから掃除は半年に一度ほどだけど、汚くてよんだ空気だからとみんなやりたがらない。でもここは聖域だからきちんと掃除しなければならないのに……。

「あそこ、出るって噂なのよ」

「出る？」

「幽霊よ」

私はそんなまさか、と答えた。だってここは大聖堂。邪なものは入らない場所だから。あの世の存在である霊魂がいるとは思えない。

「ほら、聖女見習いの子が何人か失踪してるでしょ？ その幽霊が連れ去ってるんだって言われているの。あくまで噂だけどね。まあ、聖女見習いなんて貴族の御令嬢ばかりだし、単純に掃除がしたくないだけだと思っただけだ」と

「レオノーラ」

嗜めるとレオノーラは肩をすくめた。

「だってそうじゃない。力があるつて祭司様がおつしやるから来てみたら……こんな有様なんだから。文句も言いたくなるわよ。どうせクリステイアーナからあれこれ言われたんでしょう？ 用事なんて絶対嘘よ。あの女いつもそうだから」

「……みんな仕事に慣れていないだけだよ」

「メリルは人が良すぎよ。あなた仕事を押し付けられたのよ。もつと怒らないと」
レオノーラは呆れていたけれど、私はそんなふうには考えなくなかった。

大聖堂にいる聖女見習いの多くは平民だけど、貴族の子女も多い。というのも、大聖堂は国の機関の中でも王室に匹敵する権力を持っていて、今までに何度か聖女見習いになれた女性の中から王子様と結婚するということもあつたらしい。そういうこともあつて、貴族達はお金を積んでも聖女見習いにさせたがるのだ。

私やレオノーラのような平民上がりの女性もいるけれど、貴族出身の聖女見習いは一定数いて、彼女達はお役目を率先的にやりたがらない。聖女見習いは掃除や洗濯、平民への奉仕など思っているよりも地味な仕事が多いからだ。

とはいえ、ここではみんなの身分は平等。彼女達は仕事をサボることは多々あったけれど、かといって平民に命令したりはできないから、サボられる以外は割と安穩とした日々を送っていた。

ここにくる以前、両親を亡くした私は村の人たちに面倒を見てもらいながら暮らしていた。そんなある日、村を訪れた司祭様が私に光魔法の素質があると言い、聖女見習いにならないかと誘ってくれた。私は村に恩返しするチャンスだと思ったし、誰かの役に立ちたくてその誘いを受けた。

片田舎の村から出てきた私には過ぎた身分だけれど、私が頑張れば村のみんなも安心できるし誰かが喜んでくれる。大聖堂の仕事は私の性格に合っていた。だから特別文句などなかった。

私はある程度の仕事を終えて鎮めの間に向かった。

鎮めの間は大聖堂の敷地内最深部にある建物で、普段は施錠されている。と言つても、聖女見習いで光魔法が扱える人達は自由に解錠できるから、出入りは自由だった。ただ、彼女達はここには来たがらないけど。

「失礼します……」

ギギ……と重い扉を開けると薄暗い室内に唯一あるスタンドグラスの窓から光が降り注いでいるのが見えた。だけど埃が漂つていて、正直綺麗ではない。

「さて、と……綺麗にしなきゃ」

大聖堂というのは広い敷地の総称だ。聖女見習いは交代制で建物から庭、門の至る所を掃除する。ここには毎日のように大勢の人が訪れて祈りを捧げる。綺麗でなければならぬ場所だ。

私は持つてきたはたきで埃を落とし、濡れた布巾で拭き掃除を始めた。掃除する回数が少ない場所だからか、埃も大きくてなんだか嫌な感じだ。

——どうして鎮めの間だけ使わないんだろう。こんなに広い場所なのに……。

大聖堂の敷地内には聖堂と呼ばれる大きな建物とそれに連なる幾つかの祈りの場が用意されている。鎮めの間はその一つだけど、ずいぶん前から使われていないらしい。最奥ということもあるけれど、ここには人が立ち寄らない。司祭様に聞いても、数百年も前からのことだから分からないと言っていた。

「綺麗にすれば使えそうなのに……けほつ、すごい埃……前の当番の人がサボってたのかな」

全部は無理だろうから、目立つところだけでもやっておこうと一番目立つ真ん中に置かれた祭壇に手を出す。祭壇は他と同じように埃被っていてせつかくの綺麗な装飾が全然見えない。丁寧に拭いていくと、なんとか元々の姿が見え始めた。

「ふう……もうちよつとで綺麗に——」

「——お前は誰だ？」

思わず「え？」と顔を上げる。声が聞こえたような気がした。辺りを見回すと、声はまた聞こえた。

「アイツの気配がする……いや、これは違うな。誰だお前？」

「え？ 誰……！？ 誰かいるんですか！？」

聞こえた声に反応して返事をする。反響した声がわんわんと鎮めの間に響いた。

気のせいだろうか。いや間違いなく聞こえた。男性の声だ。

けれど男性がいるのはおかしい。大聖堂に勤めている聖職者達のほとんどは女性で、男性は上位にいる数名のみ。まさか幽霊だろうか。あの噂の通り……。私はごくんと唾を飲み込んだ。

「あ、あの。幽霊さん……ですか？」

「幽霊？ ンなわけあるか。いや、そうだな……ちよつとお前、頼み事があるんだ。そ

この真ん中にある鏡があるだろう。それが汚いんだ。拭いて綺麗にしてくれないか」

「鏡？」

祭壇の上には大きな横長の台が置かれている。その上には綺麗な細工が施された鏡が置いてあった。だけど、長く掃除されていなかったせいかなかなか埃が分厚くて取れない。

「ちょっと待ってください」

私は持つてきた雑巾をバケツに浸けてゴシゴシと鏡を擦った。埃は今まで長い間積もっていたからなかなか取れなかつたけれど、根気よく続けていくと少しずつ剥がれ始めた。そしてようやく、本体の鏡の部分が見えた。

「ふう……なかなか手強い埃だったな。こんなに綺麗な鏡なのに、ずっと掃除してもらえなかつたなんて……」

「……ふつ、ようやくだ……これで俺は……」

「えつ……きやああああつ!？」

突然鏡の中から黒いもやのようなものが飛び出した。黒いものは鎮めの間の天井をぐるぐると駆け巡ると、私の前に留まった。

「……つこの気配は——」

「お前には感謝しねえとな。閉じ込められてた俺を助けてくれたんだから」

「……っ！」

黒いもやは形を変えて、人のような姿に変わった。だけどその頭にはツノのようなものがあつて、背中には黒い羽が生えている。初めて見る。だけど知っている存在。

「あ、あなたまさか……悪魔なの……？」

「ご名答。俺はノエル。あの鏡に封印されていた大悪魔様だ」

「ノエル……？ それってまさか——」

大聖堂には聖女様が残した経典がいくつもあつた。その中には、欲に従つてはならない。清く正しく、人々を導く存在であれと書かれてある。その教えとは真反対の存在。それが悪魔。

しかもノエルといえば、七人いる大悪魔のうちの一人、色欲のノエルだ。かつては多くの人間を騙しその精気を吸い取つて殺してきたと言われる……。

でもまさかノエルがああ鏡の中にいて、しかも聖女様に封印されていたなんて……。
呆然とする私にノエルはくっつ、と嘲笑うような笑みを浮かべる。

「……力が足りねえな。復活したばつだから仕方ねえか」

「あっ!?」

しゅるりとノエルの方から黒いもやが紐状になって私の方へ伸びた。そのまま腰に巻きつくと宙ぶらりんのようになせられてしまう。

「なっ、や、いやっ！ 離してください！」

「お前、聖女のなんだ？ アイツと同じ気配がする」

「わ、私は聖女見習いです！ ここは大聖堂なんですよ……つ悪魔でも悪いことはできません！」

「聖女見習いだア？ はっ……じゃあお前もアイツと同じ……いや、それにしちゃ……」

ノエルは下から私をまじまじと眺めている。彼は聖女様が封印したのか。なら、聖女様を知っているのかもしれない。

「ここは聖なる場所なんです！ 悪魔は動けないはずですよ！」

「残念だったな。俺には効かねえよ。俺を誰だと思ってる？ 色欲の悪魔ノエル様だぞ」

「ああつ」

黒いものがするつと修道服の中に入り込む。煙のように見えたのに実体があつて、たしかに触られている感覚がした。そのまま黒いもやは私を祭壇の上に降ろす。呆気にとられる私の前にノエルが近づいた。

「や、いや……つ来ないでっ！」

「色気のねえ声だな。お前、処女だろ」

「なっ……あ、当たり前です！ 聖女見習いは、淫らな行いを禁じられているんです……っ」

「へえ？ そりやますます面白いな」

「あつ……！！？」

一瞬、ノエルの瞳が赤く光ったように見えた。するとふわん、と視界が揺らめいたあと、ぐらりと上半身の力が抜ける。祭壇の上に寝転がりながら、ぼんやりと不敵に笑うノエルを見上げた。

「悪魔の眼は人を誘惑する。特に、お前みたいな素直で純粋な奴ほど効果てきめんなんだよ」

「う……あ、なにを、する……つつもりなの……」

「なについて、決まってるんだろ」

べろりと赤い舌を覗かせながらノエルが私の上のしかかった。いくら大聖堂に勤めている聖職者であっても、それなりの知識は持ち合わせている。なにしろ、大聖堂は淫らなことを禁止していたから、それに触れることがないようにと必死に教えを守ってきたのだ。

特に聖女見習いは特別な力を持っている。それは欲に身を任せると失われてしまうもので、ゆえに淫らな行いは絶対禁忌だった。

だが、ノエルはそんな規則など知ったことかと言わんばかりに私の服を引き裂いた。びりつと派手な音を立てて布が引き裂かれる。露出された私の胸はまだ曇っているステンドグラスから降り注ぐ薄暗い陽光の元に晒された。

「ああ……っ」

「面^{ツラ}と体は上出来だな。目覚めの食事にしちや豪勢だ」

「や、です……っやめ、て……っ」

「やめてっつて言っつてやめてくれる悪魔がいると思うか？」

「あっ……」

いきなり胸をぐにゆりと揉まれた。白い胸にノエルの細長い指が食い込む。尖った爪が皮膚に食い込んで少し痛い。

「いやああっ！ 触らないでえ……っ」

「こんなところで質素な生活送ってるにしちや豊満な胸だな。処女の癖にご大層なもんぶら下げやがって」

「あうっ♥♥」

尖った爪が私の胸の突起に食い込む。白い胸に埋まっていた小さな突起の穴にぐいぐいと爪先を入れるとノエルは弄ぶように私の反応を確かめた。

「あ、うう、んん……っ♥♥やめ、て……♥♥あっ♥♥爪、痛いからあ……っ♥♥」

「痛いくせにんな甘い声出してんじゃねえよ。やらしい乳首だな」

ぎゅむっ♥♥ぎゅむっ♥♥ギユニツ♥♥ギユニツ♥♥

「あっ、あっ♥♥待っ……あっ、んんっ♥♥ん、ん……っ！♥♥」

ノエルが爪を突き立てるたびに変な声が出てしまう。できれば反応なんてしたくないのに、触れたところが妙に痺れて頭がふわふわしてしまうのだ。

「やめて、くださ……っ！　なんでこんなこと……っ」

「悪魔は人間の欲望を喰らうって教わらなかったか？」

ああ、この悪魔は私を喰らうつもりなんだ。せつかく人の役に立とうと田舎から出てきたのにこんなふうになんて死んでしまうなんて……。

「こ……殺すなら一思いにやってください……」

ギョツと目を瞑る。引き裂かれるのか、それとも食べられてしまうのか。いずれにしてもろくな死に方はしないはずだ。それでもここで辱められるよりはいい。

「殺す？ 何言ってるんだ。俺は人殺しなんかしねえよ」

「え……？」

僅かに目を開ける。ノエルは至極不可解そうに私を見下ろした。

「悪魔は人殺しはしねえ。んなことも知らねえのかよ」

ぶんぶんと首を横に振る。私はここで悪魔に関する幾つかの知識を習ったけれど悪魔が人殺しをしないと聞かなかった。逆に、殺すとも聞いていない。悪魔は人を墮落させる存在。人間の欲を増幅させる存在。天界から追放された穢れた存在。そう教わった。

「悪魔は人間の欲を利用する。それが糧になるからだ。殺したら食べねえだろ」
「そう、なんですか……いえ！　そうではなくて……つならなんでこんなことを……っ」

「だから、精力を食うって言っただろ。色欲の悪魔って言わなかったか？」

「いつ……♡♡」

ノエルは前触れなく私の体の上で主張する二つの乳房の一つに噛み付いた。そのままぢゅうっ、と音を立てて吸い付く。牙みたいなのが突き立てられて少し痛いのにどこかくすぐつたい感じもして、体の奥がゾクゾクした。

——なに……？　これ……なんで……っ♡♡

「あ……っ？？♡んっ、はあ……ッ♡はあっ……♡」

「……悪くねえ反応だな。これはこれで面白いか」

「やあ……♡……っこんなの、いやです……っ♡♡」

「殺されねえんだからありがたいと思え。ま、処女はなくなるだろうがな」

ゾツとしながらもノエルに触れられると感じることを止められない。いけない、の頭に痺れている。拒まないといけないのに体が拒否してくれない。

—— そうだ。光魔法で魔物を追い払えるんだから、悪魔だって……。

私はノエルの呪縛から逃れようと手を出した。けどそれに気付かれたのか、ノエルの方が早く動いた。私の両腕は呆気なく頭の上に固定されると、突然鎖で固められたみたいに動けなくなってしまった。

「残念だったな」

「い、いやあ……！ おねが、やめて……っわ、私は聖女見習いなんです……っ処女だけは、守り通さないと……っ」

「ンなもん律儀に守る意味あるか？ お前の体が欲してるのに？」

「いやああっ！」

ガバツと足を開かれる。誰にも見せたことのない場所がノエルの目前に晒された。

「一度も使っていないだけあって、やっぱ綺麗だな」

「や、やだっ！ やめてえっ！ 誰か！ 誰か助けて！ お願い……っ」

「ここには誰も来ねえよ。どいつもこいつもここを避けてるからな」

「だって……誰もあなたがここに封印されてるなんて知らな——」

「知ってるのは聖女だけだ。その聖女もとくにババアになつて死んじまったんだろ。

誰も知らねえよ。知ってるのは、ここにおつそろしい幽霊が出るってことぐらいだな」

もしかして、あの鏡がノエルを封印していたのだろうか。だとしたら私はそれを解き放つてしまったのか。今更ながら、なんてことをしてしまったのだろう。

「考え事する暇なんかねえぞ。お前に感じてもらわなきゃこつちは食事にならねえんだからな」

ノエルは大きく私の脚を持ち上げたまま開かれた秘所に舌を這わせた。冷たいとも暖かいとも言えない感触が下から上へと舐め上げると、一瞬驚いてビクツと体が動いてしまう。ノエルはそんな私の様子をニヤニヤしながら見上げていた。

「悪くねえ感度だな。初めてでこんだけヒクつかせてりや上等だ」

「そんなこと……っああ♥♥」

また舌がねつとりとそこを舐める。ピチャピチャと聞き慣れない水音が、柔らかい感覚が身体中を痺れさせた。全身がビクビク震えると、いけないことを考えてしまう。

——感じちゃダメ……ダメなのに……っなんで気持ちよくなっちゃうの……っ



「人間は欲求には抗えない……っそういう生き物だ。別におかしなことじゃねえよ」

私の心の声に応えるようにノエルが口角を上げる。

「感じたんならそれがお前の本心だ。偽ってる方がおかしいだろ？」

「そんな、こと……っ」

「ないってか？」

ノエルの白く細長い指が、不意に下半身のある一箇所に触れた。すると私の体が大袈裟なほど大きく跳ね、お腹の奥が熱く疼いた。

「な、何を……っしたのですか……っ今……っ」

「何って、触っただけだが？」

「だって……！」

「クリトリスも知らねえか？ さしずめ、快樂のためにだけ存在する場所つてところだな。ここはな、女にしかねえんだ」

知っている。私達は陰核と呼んでいた。体を洗う時以外、触ってはいけない場所だと言われている。そもそも、下半身は不浄の場所だから、あまり触るのは良くないと。

スリツとそこに触られると、それだけで言いようのない快感が込み上げた。まるで魔法か何か使われているのだと錯覚するほど、ノエルがそこに触れると気持ち良くなってしまう。

「ああ……っ！？♥んっ、はあ……ッや、めっ♥はあっ……♥」

「気持ちいいんだろ？ 腰が浮いてるぞ」

「ち、ちがいますっ……ああっ♥♥これ、はあ……っ♥♥ふあ、ああっ♥だめ、だめ……っ♥あっ、ああ♥」

トントンっ♥♥トントンっ♥♥すりすりっ♥♥

——ダメダメっ♥♥そこ、トントンっ♥♥つてされたら気持ち良くなっちゃうのに♥♥イジられたら頭おかしくなっちゃう♥♥

「ほら、気持ち良くなってきただろ。ここが硬くなってきた。クリトリスが興奮してる証拠だ」

「ひああっ♥♥クリ……っいん、かく……っ♥♥ひあ……っあ♥♥あ♥♥だめっ♥♥さわっちや……っ♥♥♥♥」

ノエルは拒絶の言葉なんて聞く耳持とうとしない。秘所を指で広げながら羞恥心を煽り、その上でぷっくりと膨らんだ花芽を摘む。その度私は頭の中が真っ白になって、雑念がひとつ、また一つと消えていくようだった。

悪魔の言いなりになどなつてはいけない。甘い言葉に耳を貸してはいけない。淫らな行いをしてはいけないとあれほど散々言われたのに。けれど触れられるたびに理性は崩

れ、思考は乱されていく。なんとか堪えようとしてみたけれど慣れない刺激に堪えるのは容易なことではなかった。

「あつ……♥あつ♥あつ、あつ♥♥♥♥♥だめ……つ♥♥♥だめえ……♥♥♥おかし
く、なるう……つ♥♥」

「なればいい。ここには俺とお前しかいねえ。お前が快楽にふけようと何をしよう
と……お前の自由だ。そうだろ？」

「ん、うう♥♥あつ……で、も……♥私は、聖女、見習いだからあ……♥♥こんな、淫
らなこと……つしちや、いけな……あつ♥♥♥」

「淫らの何が悪い？ 人間は子を成す時交わるだろ。あれが淫らじゃなくてなんだって
言うんだ？ 恋人同士で愛し合うのも淫らか？ なあ、聖女見習いのメリル」

「ああつ！？♥♥」

ゆつくりと陰核を舐められた。擦り切れた精神が一瞬弾け、呆然とノエルを見つめる。指で触られた時ですらあんなに気持ちよかつたのに、舌で舐められると段違いだ。柔らかい感触が心地よくて、頭の中が快楽で埋め尽くされる。

ノエルはニヤリと笑い、再び舌を突き出した。

レロレロレロッ♡♡♡レロッ♡♡♡レロおくくっ♡♡レロンッ♡♡

「あっ♡♡あつ、あ、あ♡♡だめ……っ♡♡そこよわいからあつ♡♡陰核っ♡♡舐めな
いでえ♡♡気持ち良くなつちやう♡♡」

「舐めるのが駄目か？ なら……」

膨らんだ陰核にノエルの薄い唇が吸い付いた。そのまま小さな突起を唇で挟み込むようにして、赤子のようにそこをちゅぱちゅぱと引つ張る。

「あああああ〜〜〜っ!?!♡♡♡やっ♡♡あ、あ、あああああつ♡♡だめえっ♡♡おね
がっ♡♡やめてえ♡♡♡ひあつ♡♡♡もおやめて♡♡ゆるしてえっ♡♡♡陰核だめな
のおっ♡♡♡」

駄目だと拒否するとノエルの唇の吸い付く力が強まる。ぢゆるぢゆると音を立てて激しく責められれば余計なことを考える暇などない。得体の知れない感覚が体を支配して頭が変になつてしまふそうだ。

「れろオ……♡♡♡ちゅぼつ♡♡♡……もういきそうなんだろう？ 我慢しないでいい。それがお前の求めていたものだ……♡ぢゆるつ♡♡♡」

「んああつ♡♡♡ああつ、ひつ♡♡♡イ、く……？ わ、かな……♡♡♡あつ、んあ……♡♡♡」

「そうやつて興奮して気持ちよくてどうにかかなりそうなのことだ。なあに、悪いことじゃねえ。一度イけばスッキリするぞ？ もつともつと開放的な気分になる……」

ちゅつ♡♡♡ちゅうううううつ♡♡♡ぢゆるるるるつ♡♡♡

「あつ？！♡♡♡あつ♡♡♡あつ、あつ♡♡♡ああつ！♡♡♡やつ♡♡♡だめつ♡♡♡だめつ……！！♡♡♡だめえつ！♡♡♡おかしくなる！♡♡♡いくのおつ♡♡♡いつちやいますつ♡♡♡いくからあつ！♡♡♡♡♡♡」

意地悪な瞳が私を見上げたまま花芽を強く噛んだ。痛いはずなのに強烈な快感の波が押し寄せてピン！と体が引き締まる。私がそれから逃れようとジタバタすると、ノエルは益々突起にしゃぶりついた。

「ひああああっ♡♡♡、ああっ♡♡♡やだやだやだっ！♡♡♡やめてえっ♡♡♡んお♡♡♡そこだめえっ♡♡♡噛まないれえっ♡♡♡はなひへっ♡♡♡だめなのおっ！♡♡♡♡♡♡♡いつひやうっ♡♡♡イぐ♡♡♡イぐイぐっ♡♡♡いつひやうううっ！♡♡♡♡♡♡」

頭が真っ白で他に何も考えられない。ただ怖いほどの快感から逃れたいとしか。目前の淫猥な光景が余計に快感と羞恥心を掻き立てて、声を上げることではか発散できない。

鎮めの間に私の声が響き渡る。拷問のように続いた時間はどれぐらい経ってからか、私の足が痙攣し始めたところでようやくやく終わった。

「はー……♡♡♡はー……♡♡♡はー……♡♡♡はー……♡♡♡はー……♡♡♡」

脱力したまま息を貪る。息切れを起こしたわけじゃないけれど、心臓がバクバクして、体が快感の余韻を治めようと必死だった。

あんなふうに感じたのは初めてだ。大聖堂は卑猥な行いを禁じている。だけどあんなふうにされてしまったら……。

体は解放されたはずなのに何故だかスツキリしない。体の奥がムズムズする。そう、ちようど股の間。先程ノエルに触れられた部分が。

——— どうして……？ もう終わったのに。なんで股の間がうずうずしちゃう

の……っ♡♡

「一度快感を味わえば病みつきになる。大聖堂の連中は不幸だな。こんなことも知らねえで生きてるなんて」

ノエルの指が割れ目をなぞる。すると、クチュ……と水つぽい音がした。どこか粘着質があつて、なんだかぬるぬるしている。

「わ……わたしに、何をしたんですか……!!」

「女は快感を感じるところが濡れる。セックスすんのに乾いてちゃ話にならねえからな」

「せ……せつく、す……？」

「男のチンポをここに挿れるんだよ」

ノエルの直接的で卑猥な言い方に私は赤面ではなく呆然とした。大聖堂で暮らしているとはいえ、それぐらいは知っている。それは子供を作るために必要な行為で、それ以外のためにはいけないことだと。大聖堂では聖女の矜持を守るために必要なことだと言われていた。

だが、こんなことは知らない。快感を与えられると体がこんなふうになるなんて。まるで中毒のように、私の体は満足しない。

「処女にしちやあずいぶん濡れてるな。禁欲生活でムラムラしてたのか？」

くちゅ……♡♡♡ぴちちや、ぴちちや……♡♡

「あつ、あ……つ♥♥あ、ああ……ツ♥♥そこ、クチュクチュしないでえ♥♥あ、あ、だめえつ♥♥♥♥気持ちいいの♥♥♥♥あう♥♥」

「気持ちいいならもつとしてやるよ。ほら、どこだ？　どこが気持ちいいか言ってみろ」

クチュクチュ♥♥クチュクチュ♥♥クチュクチュ♥♥

「ああ♥♥♥♥だめつ♥♥♥♥だめえつ♥♥♥♥ああああ♥♥♥♥ほんとにだめなの♥♥♥♥だめつ♥♥♥♥敏感だからあ♥♥♥♥ひあああ♥♥♥♥♥♥」

ノエルの指がゆつくりと割れ目を擦る。さつきまで吸い付いていた花芽にギリギリ当たるか当たらないかのところまで触れられると、また気持ち良くなってしまうようで、頭が変になりそうだ。触れられるたびに腰がビクビク跳ねるせいで、反応していることが丸わかりになってしまう。ノエルはそれを見てまた気持ちいいところを何度も擦り上げた。

「ふ、んう……っ♡♡あんっ♡♡の、える……っ♡♡おねが、もうだめ♡♡限界ですっ♡♡スリスリしないでえ……♡♡ここ、おかしくなっちゃう……っ♡♡さつきからお腹が疼いて、おしっこみたいなの、出ちゃいそうだからあ……っ♡♡」

「へえ……?」

ニヤリと笑った刹那、ノエルの指が唐突に私の中に指先を埋めた。私の中に、ぐぶぐぶと指が深く挿入されていく。

「ひあっ!?!♡♡や、やめてえ……っ♡♡そんなところに指挿れないで♡♡♡♡んあ

♡♡あっ♡♡♡つやだ♡♡♡お腹変なの……っ♡♡」

さつきまで感じていた疼きが余計に深まったような気がした。ノエルは中指を一番奥まで入る限り押し込むと、そのまま指を中でぐにゅぐにゅと押し上げる。するとじわりと奥で何かが滲むのを感じた。

「よく濡れてるな。えらいえらい。俺はコイツが大好物なんだ。悪魔は人間の欲を喰らうつて言うだろ？俺のエネルギー源になつてるのは、女の体液……コイツつてわけだ」

「んおツつ♥♥♥」

一番奥の指がある箇所をぐい、と押し上げると排尿感に似たものを感じた。突起を吸われた時とは違うが、同じぐらい快感が強いものだ。

「ここがポルチオだ。押すと気持ちいいだろ」

「ポル……チオ……？♥♥♥おツツ！？♥♥♥」

ムギユツ♥♥♥ムギユツ♥♥♥ぐにんつ♥♥♥グニグニツ♥♥♥

「ふおつ♥♥♥おつ♥♥♥そこお♥♥♥ポルチオらめえつ♥♥♥それイっちゃううつ♥♥♥おツ♥♥♥押さないれ♥♥♥んお♥♥♥でちゃうの♥♥♥おしつこでちやいますつ♥♥♥」

「ああ……中がどんどん潤んできたな。いいぞ、もつと出せ。全部俺が吸い尽くしてやる」

「ひい！？♡♡いやああっ♡♡もうやだあっ♡♡いくからあっ♡♡そこ、押されたらっ♡♡おっ♡♡お腹へんなの♡♡おしっこ、もれちやいそうになるの♡♡おねがっ♡♡ポルチオいやああっ♡♡あ、あああっ♡♡また来ちやううッ♡♡変になっちやうッ♡♡」

「なれよ。お前のいやらしい姿、たっぷり見せろ」

ポルチオを押し上げる指が中でぐちよぐちよと激しく動く。中で指を描き回されて変になりそうだ。唇を噛んで必死に押し殺してみるもののほとんど効果はない。それどころか私が目に見えて耐えている素振りを見せるとノエルの指の動きが激しくなつて悪循環だった。

「あううっ♡♡つふあ♡♡はあっ♡♡あ、あっ♡♡ぬ、抜いてえっ♡♡抜いてください♡♡もうイきそうなんですっ♡♡お腹も頭も変になるうっ……♡♡」

「一度快感に身を落とした人間が上がってくるのはそう簡単なことじゃねえ。落ちちまえよ。その方がずつと楽だぞ？」

「い、やあ……つく♥♥ああ♥♥わ、たしは……聖女、見習い……つだからあ♥♥きもちよくなつちゃ、だ、め……つんひいつ♥♥」

「そうかよ。じゃあ最後までしちまわねえとわかんねえか」

「最後——え……」

息も絶え絶えな私の前で、ノエルは自らの淫部を取り出した。それは私が思っていたものとはるかに違う。いや、正確にはほぼ同じだったが、色や大きさはまるで別物だ。

——な、なにあの大きさ……♥あんなの見たことない……つ♥♥

大聖堂には聖女見習いが持つ治癒の力を求めて訪れる人々もいる。そういう人達の治療をする時、少なからず男性の裸を眺めることもあった。

だけどそれは治療を目的としていたし、傷ついた人を前にそんなふしだらなことを考えたりはしない。

でも今は……ノエルの大きな肉棒を見て、何かを思わずにはいられなかった。

「人間のと変わんねえだろ」

ノエルはそう言い放つが、そんなわけがない。形は男性器だが、普通の男性はこんなに大きくない。筒のように伸びて、太く聳え立ったそれは先端が膨らんで、ビクビクと震えているようだった。湧いてはいけない好奇心が湧いて、あんなものを挿れられた後の想像を頭の中で描いてしまう。

「ま、俺のは精気を吸い取るためにあるもんだからな。人間とは使い道が違うが」

「あ、あああつ!? ダメですつ! それだけはいやあつ!」

膝を割って私の股の間に腰を割り込ませようとしたノエルを必死で止める。だけど体が動かなくて、無防備なそこにノエルの一物を招き入れてしまった。

「私は聖女見習いなんですつ! セックスしてしまつたら 力が使えなくなるんです! どうかお願いですからつ、もうやめてください!……!」

「………そんで? 実際使えなくなった奴は見たことあるのかよ?」

「え………あああああつつ!!
♥♥♥♥♥
」

ずぶつ……！♥♥と太いものがこじ開けるように蜜壺へ侵入する。初めての時は痛いものだと聞いていたけれど、そんな痛みは微塵も感じなかった。ただ違和感はある。ただ違和感はある。ただ違和感はある。

普段何もなくあった場所に何かがある違和感。そこに大きなものが収まっている違和感。ただ違和感はある。

「にゅち……♥♥♥♥ぐち、ぐち♥♥♥♥ぬちよ♥♥♥♥ぬちち♥♥♥♥ぬぶう……♥♥♥♥

「ひっ……♥♥いやああああ……♥♥♥♥やめっ、やめてえ……♥♥♥♥あっ♥♥♥♥セックスいやあっ♥♥♥♥」

「狭いな……っ処女は、久しぶりだ。ああ、だが……この吸い付きは相変わらずたまんねえな」

「ひあっ♥♥♥♥あっ、あっ♥♥♥♥やめええっ♥♥♥♥そんなおつきいの入らないっ♥♥♥♥んおこわい、からあっ♥♥♥♥おっ♥♥♥♥ッおっ♥♥♥♥」

「怖いとか言ってる割に汁がダダ漏れだぞ。ほら、聞こえるだろ」

「にゅち……♥♥♥♥にゅち、にゅちっ♥♥♥♥ぬちよ♥♥♥♥ぬちゅう……♥♥♥♥

ノエルが肉棒を出し入れするたびに卑猥な音が響いた。明らかに濡れた音がその穴の中から響いている。

力を失ってしまう絶望感と初めてセックスをした高揚感で頭の中がぐちゃぐちゃだ。拒否しなければならぬのに、もう今更意味がないと心が墮落しそうになってしまう。

ノエルの肉棒は中をゆつくりと往復した。けれど初めての私に気を遣っているわけではなく、私の顔をずっと観察していたから、困る姿を見て楽しんでいただけだろう。

一突きするたびに奥が拡げられていく感覚。憧れていた高潔な聖女から遠ざかっていく気がした。

「ほら、見えるか？ お前のここが俺のを咥え込んでんのが……」

ぐぼつぐぼつ♡♡♡じゅぶぶつ♡♡

「ふおつ………！♡♡♡おつ♡♡♡そこだめっ♡♡♡おんっ♡♡♡おッッ！？♡♡♡激しいのいや

ああ………つ♡♡♡あう♡♡♡見ないで♡♡♡見ないでえっ♡♡♡」

「駄目だ。ちゃんと観察しろ。言うんだ。自分のがどうなってるのか」

その腫で見つめられると、思考がふにやりと歪んでしまう。許してはいけない。受け入れてはいけないのに、従ってしまう。ニヤリとノエルが笑みを浮かべた。

「言ってみろ……そうしたらもつと気持ち良くなりやう。気持ち良くなりたいたらどう……？」

悪魔の囁きに耳を傾けてはいけない。だけど自分とノエルの結合部を見た瞬間、卑猥なその光景に意識を持つていかれてしまった。

「あ……♥♥ノエルの、おちんちん……♥♥挿れられて、わたしの、おまんこ気持ちいいです……♥♥奥が、疼いてえ……♥♥つこんなの初めてなのにい……♥♥♥♥」

「そう、それがお前の本心だ。心の底では快楽を求めている。だから、気持ち良くなることは間違いないやねえ。心のままにもつと求めてみる」

「んおおっ!?!♥♥♥♥」

ごりっ♥♥と長いものの先端が奥を抉る。亀頭の先がポルチオに当たってまた奥からじわじわといやらしいものが溢れてくる。

ぐちゅっ♥ぐちゅっ♥ぐちゅっ♥ぐちゅっ♥ぐちゅっ♥ぐちゅっ♥

「おっ♥おっ♥おっ♥なに♥これえっ♥ぎ、ぎもち良すぎりゅっ♥ノエルの極太おちんちん♥おまんこに刺さってりゅの♥おっ♥おっ♥おっ♥おっ♥おっ♥おっ♥おっ♥おっ♥おっ♥おっ♥おんッ♥声止まんにゃい♥♥♥」

「今のお前はただの女だ。どんな声を出そうが、どんな淫らな姿になろうが、関係ねえ。ここには俺とお前の二人だけだ」

ノエルの腰の動きと連動して前後に体が揺さぶられる。その度にノエルのものが一番奥を突いて、その度に私の喉から獣みたいな声が漏れた。

揺れる胸を細い指が鷲掴みにして、くりくりと先端をなぶる。そうするとノエルを啜え込んだ場所がぎゅううっつと締め付けて余計に彼を感じてしまった。

——私は聖女見習いなのに♥こんなことしちゃいけないのに♥気持ちいいのが止まらないの……♥♥ノエルにもっともっつと気持ち良くして欲しいって思っちゃう♥♥♥

「気持ちよさそうな顔しやがって……舌が出っ放しだぞ」

「んっ、おう♡♡ふ、太くてっ♡♡おっきいのが……っ♡♡お、お♡♡奥につ♡♡うう♡♡んっ♡♡ん、んっ♡♡当たって……っ♡♡おまんこのおっ♡♡あ、あっ♡♡きもちいいところっ♡♡あうっ♡♡ごちゅ♡♡ごちゅ♡♡っ、てえ当たりゆのお……♡♡っお、ん♡♡」

「奥が気持ちいいか？ じゃあもつとしてやろうな」

ぬぢッ……♡♡ジュプ♡♡ジュプ♡♡ジュプッ♡♡ジュボ♡♡ジュボ♡♡ジュボッ♡♡

突然激しくピストンが始まった。先ほどまで優しく動いていたはずのノエルの腰がパンパンと音を立てて私の腰にぶつかる。その勢いで肉棒を一番奥の子宮口に口付けるようにゴツゴツと当てた。

「くくくッッ！♡♡♡♡お、お♡♡お♡♡お♡♡おっ♡♡きもちいい♡♡きもちいい♡♡きもちいい♡♡

♡♡♡♡これえっ♡♡おっ、お腹の奥くるう……っ♡♡ひああ♡♡またきちやう♡♡頭変になっひやう♡♡イくうっ♡♡」

「そうだ……そのまま快樂に身を任せろ。欲望を全部ぶちまけるんだ」

言葉に従ってしまった私は自ら脚を広げすっかり潤んだ蜜壺にそそり立ったものを受け入れる。無防備な穴に容赦なく叩きつけられる様がなんとも淫秘で見えているだけで背筋がゾクゾクと興奮した。

「すっかり蕩けた顔しやがって……」

繋がったままもたれてきた体がぴつとりと密着する。汗ばんで熱を持った私の体と違い、ノエルの体は冷たかった。悪魔そのものを表すような冷たさだ。だけど今はそれが逆に心地よくて、突き出された舌を自分の舌で絡め取って、口付けに応えてしまう。

「んむ♥♥♥んちゅ……っ♥♥♥ん、んっ♥♥♥ちゅ……♥♥♥んちゅ♥♥♥んおっ……♥♥♥」

悪魔との口付けは契約の意味だと心のどこかで思いながら、ぐちゅぐちゅと体全体を絡め合った。

「ひっ、いっ♥♥んっ、の、えるうっ♥♥もうだめえっ♥♥お♥んお♥♥もう限界れしゅ……っ♥♥♥♥イっひやうっ♥♥ゆるひへえっ♥♥イっひやうのお♥♥あう♥♥許ひへくらしや……ッ♥♥♥♥」

「ああ、お前の中もそろそろ頃合いになってきたからな……俺もいただくとするか」

ごりゅ♥♥と奥に先端が叩きつけられた。そのままぐちぐちと擦り付けられる。中から温かいものがじわりと溢れた気がした。

「悪魔の主食は人間の欲だ。下級悪魔は魂を喰らわねえと欲が摂取できねえが、俺みたいな位の高い悪魔はそれ以外にも摂取できる。例えば……お前の体、それに付随する全て。特に欲にまみれたココは、ご馳走の宝庫ってわけだ」

「あっ?!♥♥♥♥あっ♥♥♥♥あっ♥♥♥♥あぁっ♥♥♥♥やっ♥♥♥♥だめっ♥♥♥♥だめっ!♥♥♥♥だめえっ!♥♥♥♥♥♥♥♥それだけはいやあっ!?!♥♥♥♥♥♥♥♥」

あんなに気持ちよくなっても反射的に拒否してしまう。ノエルが何をしようとしているか分かったからだろうか。彼との結合部が見えなくなるほど奥に挿し込まれて、絶望感が込み上げた。

「ご褒美だ。目一杯くれてやる」

「あああつ！？♥♥♥♥♥いつ、いやあああつくくッ！！♥♥♥♥♥」

ぶぼつ♥♥♥びゆるるりゆつ♥♥♥びゆくくくく♥♥♥ぶびゆつ♥♥♥

破裂音に似た音を立てて中で何かが弾けたのが分かった。打ち込まれた熱杭から熱いものがどくどくと放たれる。どうすることもできない中、それが心臓のように早鐘を打ちながら吐き出すのを感じるしか出来なかった。じわじわと温かいものが中で広がっていく。絶望していたのに感じてしまう。犯されているのに感じてしまうなんておかしいのに。

「は………すげえな。久々だ………聖女見習いつてのは伊達じゃねえのか」

見るからに精気を取り戻したノエルは瞳をぎらつかせながら私を見下ろした。中で溢れたものがじわじわと広がっていく。恐怖からか、股の間から温かい液体がジョロ……と零れた。目尻に涙が浮かんで、ぼろぼろと落ちる。

「おいおい、漏らすほど怖かったか？ 痛くはしてねえだろ」

「も……いやあ……許して……こんなのいやです……っ！ こんなこと、したら……っ私、ここから追い出されてしまう……っ」

「……聖女が清いなんて幻想だろ。誰だって心の奥には欲を抱えてるもんだ」

「ふおっ……！！？♥♥♥」

中に収まっていたものが再び動き始める。吐き出されたもので満たされた秘所に肉棒がズブズブと挿さり、またあの目眩がしそうな快感が押し寄せた。怖くてたまらないのに体が反応してしまう。

「あ、あっ♥♥♥♥♥らめっ♥♥♥らめえっ♥♥♥んおッ♥♥♥ら、めっ♥♥♥おちんちん、いやあああっ！♥♥♥♥♥感じちゃうの♥♥♥んひいつ♥♥♥おまんこおがしくなりゅ♥♥♥う♥♥♥」

「やだね。こんな美味しい餌、逃すかよ……ッ」

「あつ、あ！？♥♥♥ほんとにつ♥♥♥らめにやのお♥♥♥イぐ……つ♥♥♥あ、あ、あつ♥♥♥
またいくつ♥♥♥イクツ♥♥♥イクつ♥♥♥イクつ♥♥♥イクつ♥♥♥イクうツ！！♥♥♥」

股の間からまた温かいものが吹き出した。恥ずかしい姿しか見せられない自分に絶望しているのに、ノエルはますます楽しそうに笑う。

「はっ、イヤイヤ言ってる割に潮吹きは一丁前にするんだな」

「ふおっ……！？♥♥♥おっ♥♥♥しお、ふきつ……♥♥♥あう♥♥♥あつ♥♥♥それいきま

すう……つ♥♥♥おちんちん奥に、ゴリゴリされたらツ♥♥♥なんかきちやうんですつ♥♥♥おまんこからあつたかいのぴゅっ♥♥♥ぴゅっ♥♥♥つて出ちやうのおツ♥♥♥」

「それでいい……快樂に従順になれ。その方がずつと楽だぞ？　なあ、メリル」

名前を呼ばれると意識がぼんやりしてくる。絶えず打ち続ける肉棒に理性にもやがかって、また快感に侵食されてしまう。いけないのに。受け入れちゃダメなのに……♥

「いいことを教えてやるよ。人間はな、悪魔に犯されたぐらいじゃ穢れねえんだ」